

世界
紀行

アジア・アフリカ・南米を巡り、 大自然と人間に出会った青春一人旅 感動を求め世界へ

杉山大貴 (NI-Youth OB)

前編

ヒマラヤ紀行

この旅の紀行は事実上僕の旅の基盤となったヒマラヤへの挑戦から始めたい。

雪山での一日は、まず朝の6時頃に起きてヒマラヤ山脈の山々を渡り歩くトレッキングに繰り出すことから始まる。ここヒマラヤには日本の富士山の2倍以上の高さを誇る山が100峰程もあり、8000mを超す世界最高峰の山々が14座も存在する。(コースではこのうちトップの4座を拝める)道には荷物を運ぶポーター用の牛が列をなして歩き、氷河の川にかかる断崖絶壁のつり橋を渡っていく光景や、至るところで見渡



ヒマラヤ道中、ポーターの牛と何度もすれちがう



ヒマラヤ道中吊り橋にて



エベレストを眼前に(5550m 地点)

せる壮大な山々など、目に入るもの全てが僕の目には新鮮で驚きに満ちていた。トレッキングの時間、歩くのはつらかったがとてもエキサイティングで楽しかった。

昼過ぎには次の山小屋に着き、窓からの陽射しで日光浴をしながら体のメンテナンスをして夕飯まで昼寝をして過ごす。夕飯は18時位頃に食べて、その後は外で毛布にくるまって綺麗な星空を見る。山小屋の大部屋に戻り、友達と互いの母語を教え合ったり将来を語り合ったりして眠りにつく。

こんな生活が10日間！

水が出ない日や電気がつかない日がほとんどで、不便だがその分「最近天気がいい」とか「夜に部屋の電気がついて本が読めた」「昼に肉が食べられた」などの些細なことで本当に嬉しくなる。

毎朝早起きして歩いている時も、途中で疲れて芝生や雪の上に寝転んでいる時も、ついに世界一のエベレスト山を目の前にした時も、いつも大自然に包まれた生活をした10日間は本当に幸せな時で、この日々は僕の世界一周の大きな基盤となった。

旅の始まり

僕の世界一周の旅の始まりはタイ、バンコクのカオサンロードという安宿街からだった。

泊まった宿は監獄を思わせる白い壁に囲まれ、ボロいベットが一つ置いてあるだけの狭い部屋だった。外に出るとごった返す人、人、人。麻薬と酒で狂乱するフリーク達。やけに観光客に擦れた現地人。この地に沈没した旅人達。

「いきなりやばい世界に来てしまった」そう思うと、"これから一人で本当に世界を旅出来るのかな" "死ぬかもしれない" そんな漠然とした不安が浮かんで来て、夜はあまり眠れなかった。

翌日、タイ南部のタオ島という島に向かった。バスと船を乗り継いでほぼ丸一日かけて島に着いた頃は、前日から殆ど眠れていなかったせいかクタクタに疲れていた。

部屋に荷物を置いてドアを開けると波の音が聞こえた。音に誘われて海の方へ歩いていき、静かな海辺に着くと僕は思いきって寝転んだ。心地良い風と耳に響く波と木々の葉がこすれ合う音、少しまぶしく揺らぐこもれび、そして背中に感じる砂浜の温もりがあまりに気持ち良く、僕はそのまま深い眠りに落ちた。夢の中で今まで味わったことのない開放的な快感を感じた。ここは未開発リゾートで人が多くなかった事もあってか、僕は島に着いた早々砂浜でな



タオ島の夕陽

んと 5 時間程も眠っていたのだった。この島で僕はよく海辺で昼寝し、海に入り、丘を歩き、自然と一体になる気持ち良さを覚えた様に思う。

こういうのんびりした島では心に自由さえ掴んでいれば誰もが楽しめる。

旅の基盤

ネパールへ飛んだ。

ここではタイとはうって変わって、着いてから何日にも渡って雨が降り続いた。治安も悪いので、少し雨が上がった時に街やお寺を見て回るだけの日々が1週間程続いた。そうするうちに次第になんとか陰鬱な気持ちになっていった。さらに何日も閉じこもっていると、外に出たり人と話したりすることなど、色々な事が億劫になってしまった。

ついにある日そんな気持ちが爆発した。

「足りない。圧倒的に何か足りない。」

とんでもない感動を求めてスタートした旅のはずだった。どんな辛い時でも自分には世界中でドでかい感動を味わうという夢があるからと行動し続け、やっと実現したこの旅！

「それがこれかよ！！」

自分は今、死ぬのが怖くて人を恐れ、自然を恐れ、何もできずにいる。

情けなくて絶望感で一杯になった。

そんなある日、一週間ぶりに天気が晴れたのでキルティプルという田舎町に行った。そこで雄大な山を夢中で眺めていると、「もしエベレストに一人で行って山と一体となれたらどんなに幸せかな」と思った。

だが一方で「でもお金かかるし、危険だよな。旅の序盤で怪我してたら世話ないし」と頭の中に言い訳ばかりが思い浮かぶ。なにしろエベレストに行くには10万円程もかかる。これは貧乏旅の僕にとっては旅全体に影響する大出費だ。それにトレーニングや事前準備などを何もしていない僕にとっ

てはかなり危険な事でもある。

しかしその後歩いていても食事をしていても、エベレストへの憧れは募るばかりだった。

ゴチャゴチャ考える前に自分の気持ちは？

「行きたい！！」

素直にそう認めると、すっとしたのと同時に物凄い喜びのエネルギーを自分に感じた。

そうしてエベレストへの挑戦が決まったのだった。

この時の気持ちの変遷を経て冒頭で述べた"旅の基盤"ができた。それは「旅全体をあまりコントロールしようとせず、常に"今"の自分の気持ちをありのままに観て、それに従う」ということだ。

「"今"どこへ行きたい？ 何をしたい？ どうなりたい？」

そんな事を全てその時その場で見抜き、考え、決断していかなければいけない。

そして自分で決めた道を行くから一番ワクワクするし気持ちもノッてくる。

その時迷いはなくなり旅がもっと楽しくなる。」

そういった事が本当に大切であると僕はエベレストに教わった。

異世界の試練

陸路でインドに入った。列車を待っているとき、なぜか突然耳が聞こえなくなった。そのうち視界も狭まってきて、僕はそのまま倒れてしまった。しばらく気を失った後意識が戻ったのだが、その間周りの人は誰も助けに来なかった。

後でその理由がわかった。インド人は駅で列車待ちをする時、床に寝て待つのだ。それでは人が一人倒れていても気に留めないはずだ。なんというカルチャーショックだろう。

結局ガンジス川の街バラナシまで移動してから病院に連れていってもらい、治療を受けた。おそらく食中毒等だったのだろうが、手の甲の細い血管に注射を20本も打たれ、入院した。

2日程して気が減入ったので病室を出てみると、病院内は手足がなかったり、呼吸が辛そうで今にも死んでしまいそうな人達で溢れていた。「そうかここバラナシでは、ヒンドゥー教徒が死後ガンジス川に流してもらうために死期の近い人達が集まるのか」と頭では納得出来たものの、あまりの地獄絵図に圧倒された。



インド独特の世界観、ガンジス川

体調が回復した後ガンジス川をボートで漂ったが、見たのは異世界だった。信仰に生きる人達と彼らが創り出す独得な世界。現地の人と話して感じる自分と全く違う人生観。そしてインドの人達は良い意味でも悪い意味でもとても人間らしかった。大変な目にもあったがインドを去る頃には「ああ旅って面白い！」素直にそう思った。

(後編に続く)

旅の舞台 (前編)

